

秘境でも高齢者送迎中

「生き放題」には勝てません！

車の運転を始めて34年、この10年ほどで同乗者の年齢がグンと上がった。

最大の功労者(？)は、「ほっとけい会」の面々だ。

いずれも共同通信卒業後すでに15〜20年が経過している。4人の年齢を合計すると309歳、平均年齢はナント78歳だ。

78歳と言えば、厚労省に押された「後期高齢者」の烙印が、すっかり板につくころだ。なのに、この4人ときたら…。「後期高齢者の次は末期高齢者？」などと、相変わらず意気軒昂だ。秘境「秋山郷」を訪ねる道中もパワー全開だった。

◇1日中、山道

秋山郷、飯山、軽井沢を巡ったこの3日間、車の走行距離はほぼ400キロだ



鈴木牧之の生家前で

った。距離としては大したことではない。高速道路なら1日でそれ以上の距離を走れることもある。しかし、今回は大半が幅員の狭い曲がりくねった山道だ。ほとんど直線がなかったと言っているだろう。

以前、民放の女性アナが横書きのニュース原稿の「旧中山道」を「いちにちじゅうやまみち」と読んで笑われたことがある。今回の旅は、笑い話ではなく、まさに「いちにちじゅうやまみち」だった。

しかも、対向車が来たらアウト。道幅が多少広めの待避スペースまでバックしなければ、すれ違うことすらできない。少しでもハンドルを切り損ねれば、たちまち崖下へ転がり落ちて、

二度と這い上がれないような難所続きた。

「こんなところで遭難しても、誰も気づかないよねえ」と誰かがポツリ。

すると、すかさず「家族だつて、探そうとしないよ！ 1カ月くらい経ってから、『そういえば、旅行に行ったきり帰って来ないけど、まつ、いいか』って…」

「そう、そう。予定どおり帰ったつて、『えー、帰って来たのお!?』つて迷惑がられるのが関の山。遭難したつて誰も探さないよ」と、妙に自信ありげに言う。その自信は、一体どこから来るのか？

◇言いたい放題、生き放題

最近、街を走っていると、「高齢者送迎中」の車と頻



軽井沢別荘第1号のショーハウス



旧軽井沢銀座を散策

繁に行きあう。こちらも同じく「高齢者送迎中」だが、かなり騒々しい点で、街を走る送迎車とは異なる。

秋山郷から飯山、軽井沢への道中も、戦争中の疎開の話、察回りや支社時代の思い出、OBの〇×さんが病氣だとか★さんは亡くなった等々、話は延々と続き、一瞬たりとも沈黙することはない。沈黙があるとすれば、聞かなかったことにしたいほどレベルの低い駄じやれを聞かされた時だけだろう。

衰えを知らず、まさに言いたい放題のクレイ爺フォロワー。こうなつたら、言いたい放題だけでなく生き放題であつてほしい。こちらも一緒に年齢を重ねます。(久貝 真澄)



使用前 使用后?

▽写真を整理中に思いがけない一葉を発見。萩莞、富信、原征と八幡の4人がスナックバーの座席に並んだ二十数年前の珍しいスナップ。軽井沢での朝、同じ並びで再現。「白髪が目立ち方など気になるけど、何より元気でいたことがうれしいね」。使用前、使用後の比較写真を見かけるが、これは人生

の壮年期と老年期かな。店のじまいが近い人たち」と大笑い。▽生き放題とは言い得て妙。クレイ爺の4人を励ます意味か、それともノー天気な変わらない様子を諭すのか。「この調子ならいつまでも生き放題」と、久貝さんの名(迷)言が飛び出した。(八)